

評者●川村 湊 (かわむら・みなと) 文芸評論家・法政大教授

「国境」から始まり、「国境」に終わる 危うい線上(戦場?)を歩き続ける

大江 志乃夫 『日本植民地探訪』(新潮選書/本体1,600円)

小熊 英二 『日本人の境界』(新曜社/本体5,800円)

黒川 創 『国境』(メタローク/本体2,800円)

井伏 鱒二 『花の町・軍歌「戦友」』(講談社文芸文庫/本体913円)

自 慢じゃないけれど(自慢
なのだが)、私は南北朝
鮮の両方から板門店へ入ったこ
とがある。北朝鮮のツアーで
開城から板門店へ入り、板門閣
から休戦ラインの境界線まで、
あと数歩というところまで近づ
いた。「米兵、韓国兵に手を振
ったり、カメラを向けたりしな
いで下さい。撃たれたら、こち
らも発砲します」といわれ、ラ
インの向こう側で立哨するアメ
リカ兵が恐ろしく見えた。

ソウルから自由の橋を渡って
板門店に入った時は、「北朝鮮
の兵士に手を振ったり、カメラ
を向けたりはけません。狙撃さ
れるかもしれませんので、生命
安全の保障はできません」と米

軍・韓国軍の兵士にいわれた。
自由の家の展望台から見る北朝
鮮の人民軍の兵士が、非人間的
なロボットのように見え、不気
味なものを感じた。

板門店の三八度線の休戦ライ
ンは、もちろん厳密な意味では
「国境」ではないのだが、「国
境」のどちら側の立場に立つか
で、同じものが違って見える、そ
ういう体験を私に味わわせてく
れた。また、ボーダーラインのこ

ちら側とあちら側で、期せずし
て同じようなことを言い、同じ
ようなことを行っていた。板門
店へ入る観光客には、南北双方

日本植民地探訪
大江志乃夫



新潮選書

大江志乃夫(おおゑしのぶ)
1928年大分県生まれ。名古屋大
卒。茨城大名基督教教授。『日本の参謀
本部』『嵐の時』『日露戦争と日本軍
隊』『皇の世紀』『東アジア史として
の日清戦争』など著書多数。

文学作品のような歴史書、紀行書

大 江志乃夫氏の『日本植民
地探訪』は、戦前の「国
境」の話から始まる。戦前の樺
太(サハリン)には、北緯五十
度線を境に日本とソ連との「国
境」があった。そこに国境を示
す石の標識があり、双方の兵士

が警備を行っていたのである。
一九三八年一月三日、一組の日
本人男女がこの国境線を越え
て、日本からソ連へと亡命した。
演出家の杉本良吉と女優の岡田
嘉子である。「手に手を取り」
越境した二人の行為を当時のマ
スコミは「恋の逃避行」と囁し
立てた。だが、真相はもっと生
臭く、政治的なものだった。杉
本良吉は当時の日本共産党の指
示で越境し、岡田嘉子を同行し



たのはカムフラージュであり、そして二人は「日本のスパイ」としてスターリニズムの荒れ狂う社会主義帝国で、一人(杉本)は処刑され、一人(岡田)は十年の刑で服役した。彼らの「越境」は悲劇で終わったのである。大日本帝国は、戦前において台湾、朝鮮半島、樺太、関東州、南洋群島、「満洲国」などの植民地を持った。近代史の研究者である大江氏は、戦後五十年を機にこの日本の旧植民地の旅を思い付いたという。台湾(中華民国)、韓国、北朝鮮、中国、ロシア、ミクロネシアの各国、各地域の旅は、七〇代の著者にとって決して快適でも、気楽なものでもなかったはずだ。それは交通や宿泊、食事や見学の便・不便ということもあるが、日本人として過去のそうした「植民地帝国日本」の傷痕にどう向き合ったらいいのかという難問を突きつけてくるものだからだ。この時、著者はあっさりとは「越境」しない。つまり、宗主国でも被植民地国でもない、「第三者」的な客観的な立場に自分を置こうとはしない。あくまで「植民地帝国日本」の国民の一人として、その五十年後の「植民地」の現状と問題点を、

歴史家の眼で見据え、描き出すとするのである。そこには九〇年近くも前に、「日本植民地」を転戦していた一人の無名な農民兵士の眼差しが重ねられていて、それがこの本を立体的なものとしている。歴史書でもあり、紀行書でもあり、優れた「物

揺れ動き続ける

大 日本帝国の版図だけではなく、「日本」そのものの内部にも何重も引かれた「境界線」がある。そのことを膨大な史・資料を駆使して証明してみせたのが、小熊英二氏の『日本人』の境界である。「単一民族神話の起源」(新曜社)によって学界に大きな話題を投げた小熊氏だが、その次作もまた大いに話題をさらいそう。

副題に「沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで」とある。近代日本が成立するに当たって、誰を「日本

語」でもあるような文学作品。それは現在の「国境」によって閉ざされた世界地図の下に、込んだような別の「国境線」を浮かび上がらせ、ポスト・コロニアリズムの思考の有効性を「歴史」的に検証する役割を果たしているといえるのである。

「内なる国境線」

人」とするかによって、誰かを非日本人として排除することになった。日本地図の上に引かれた境界線、分割線というよりも、それは私たちの心の内部に引かれた分割のための線だった。琉球から沖縄へ、沖縄学の成立から沖縄方言論争、そして沖縄の「本土」復帰運動から独立論まで、沖縄というトポスをめぐって近代日本は、何度もその「内なる国境線」を引き直したのである。嘉手刈林昌の歌のようにいえば、唐の世から、大和の世、大和の世からアメリカ世、アメリカ世からまた大和の世へと変転してきた沖縄は、

まさに日本人という境界線がいかにふらふらと、変転劇まりなく揺れ動いたかということを集めて微している。

もちろん、アイヌ民族もまた同様であり、戦前・戦後には朝鮮人、台湾人に、この日本人という境界変動が、もろに被害として覆い被さったのである。大日本帝国の臣民として日本軍に加わり、戦争被害や責任だけを引き受けさせられながら、あっさり「日本人」であることから排除され、何の補償も慰労も受けることの出来なかった日本人たち。それは政治や権力の御都合主義により、境界線のこちら側に引き入れたり、あちら側に追い出したりという作業を、近代の過程において何度も何度も繰り返し続けた(そして今も繰り返している)。

「日本人」のナショナル・アイデンティティの問題を、これほど広汎に、総合的に、横断的に論述したものは今まではなかった。その意味では画期的な作品であるといえるのだが、一点、不足をいうとしたら、こうした近代日本のナショナル・アイデンティティについて精緻に分析し、論究する小熊氏の位置がどこにあるのかということが明らか

ブックレビュー

●「老人力」 赤瀬川原平(筑摩書房/本体1,500円)
高齢化が進む社会で、ぼけ、ヨイヨイと老人は疎んじられる。物忘れ、食後のため息など老人特有の「老化現象」を、著者は逆手にとって「老人力」と名付け肯定。例えば、物忘れについても「忘れることこのしようがなく」と言いか、面白さと言いかと評する。マイナスの力をプラスに転化し、世の老人に勇気を与えるエッセイ。

●「明日なき二人」 ジェイムズ・クラムリー 小鷹信光/訳(早川書房/本体2,200円)
あの「酔いどれの誇り」のミロと「さらば甘き口づけ」のシユグルーの二大探偵が本作で競演。親の遺産を持ち逃げされたミロ、謎の刺客に襲われたシユグルー。二人の無頼の男が、メキシコ目指してアメリカのハイウエイ縦断の旅に出る。ハードボイルド・ファンは見逃せないクラムリーの長編。

●「松茸ハント」 藤井豊一(築地書館/本体2,000円)
秋の旬の食べ物といえば、まずマツタケ。八百屋で買えば目玉の飛び出る価格のモノが、素人でも採れる方法を伝授。一般人が入山してもよい山の区別から、松茸が発生する地域・環境の条件、松茸採りのテクニクから料理法までをその道の名人が公開。松茸以外の食べられるキノコも併せて紹介するおいしいガイド。

●「叱る力」 田中真澄(KKベストセラーズ/本体1,295円)
業績が悪い、部下が伸びない、



小熊英二

小熊英二(おぐま・えいじ)
1962年東京生まれ。東京大卒。慶応大総合政策学部教員。著書に『単一民族神話の起源』、『ナショナル・アイデンティティの脱構築』(共著)、『知のモラル』(共著)がある。

かにされていないということだ。もちろん、学者として、論述者として、そうした作品内部における「著者」のアイデンティティの開示など必要はないとい

国境という「境界線上」を漂う文学

黒

川創氏の『国境』は、まさに国境の向こう側へと「越境」することを目指したものではなく、国境という「境界線上」にいつまでも佇んでいようという試みのように思える。『外地』の日本語文学選（全三巻・新宿書房）の編者でもあり、優れた解説者でもあった黒

われることは承知の上だが、私の内部の揺れ動く「日本人」は、こうした書物を読みながら常に自分の帰属や帰還する場所を問わずにはいられないからだ。

川氏は、そうした「植民地文学」の作家、作品を素材に、国境を越えたり、民族を横断したりすることの意味と問題を考えて続けようとしているのである。朝鮮、台湾、満洲、樺太、南洋群島の日本語文学。そこには台湾へ行って「魔鳥」や「女賊扇奇譚」を書いた佐藤春夫がい



る。植民地台湾の実相を見届けながら、彼はそれを「植民地旅行」の土産話のようなスタイルでしか書けなかった。そうした屈折のなかで、台湾人の日本語文学や、在台湾の日本人作家（たとえば、坂口櫻子）の「蕃地」を舞台とした小説などが書かれたのである。

そうした「植民地」の文学作品を読み続けることは、決して読み手だけを「第三者」的な、ニュートラルな立場や位置に安住させておきほしくない。シンガポール陥落の時に日本軍といっしょにシンガポールに入り、「昭南市」と改称された軍政下のシンガポールでの生活を、従軍作家・井伏鱒二は、『花の町』

黒川創（くろかわ・そう）
1961年京都生まれ。同志社大卒。作家、評論家。おもな著書に『先端・論』『水の温度』『リアリティ・カーブ』が、編著に『富岡多恵子の仕事』などがある。

という小説として書いた。そこで井伏と等身大の主人公は「昭南日本学園」に関わりを持つのだが、占領地において日本語や日本史を教えることは、決して客観的な、批評的な立場にいないことを示すものではなく、強制的に「国境」のどちらか一方に組み込まれることを意味している。政治の強制力によって、言葉や文学はたやすく「国境」のこちら側に閉じこめられる。日本文学、朝鮮文学、中国文学という「国文学」や、あるいは「民族文学」が語られる場である。しかし、異形な「日本語」で書かれた植民地文学としての「日本語文学」は、こうした常識としての「日本文学」の概念を揺るがす。それは境界線上にあり、ふらふらと、その細い、危うい線上（戦場？）を歩き続ける。

井伏鱒二（いぶせ・ますじ）
1898～1993年。早稲田大中退。作家。『ジョン万次郎漂流記』で直木賞受賞。66年に文化勲章受章。『花の町』は42年『大阪毎日新聞』に『花の街』と題して連載された。

その部下を叱れない……。極める中間管理職へ向けて、社会教育家の著者が、叱ることの重要性を説く。叱りがあってこそほめる行為も生き、人は正しく生きることになり、自信を持つ。その結果、業績もアップする。今、すべてのビジネスマンに向けて発信される、「叱る文化」論。

●「半ズボンの中のピンチ」ダニエル・ビクリ 松本百合子／訳（NHK出版）本体1,900円
1962年。14歳の夏ニエルはアルジェリアの海岸で夏休みを過ごしている。青い空、まぶしい太陽。頭の中では想像力がバクハツし、半ズボンの中ではもう一人の僕がバクハツしそう。地元少年との出会い、初めての夜明かし、そして美女が登場。少年期を見事にとらえた話題のフランス小説。

●「あなたに、逢えてよかった!!」第一巻 森津純子 牧野和子／画（小地書院）本体657円
末期ガンやエイズで、余命半年と診断された患者のみを取容する病院が「ホスピス」。「姥捨山」敗北の医学へ、若き女性医師が体当たりで飛びこんだ。死に直面した患者と深くかわることで、出会い、別れ、生死の意味を考えたい体験を女性漫画家によりコミック化。

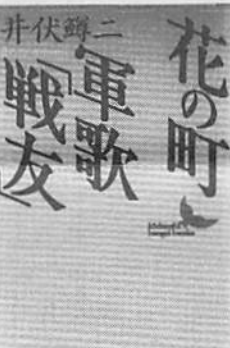
●「夫婦再発見」田辺厚子（文藝春秋）本体1,429円
メキシコ奥地の工場建設のため命を削るような努力をした夫に、会社は屈辱的な人事で報いた。酒量が増え、人格が崩壊して行く夫を救うために、妻である童子が立ち上がる。熟年夫婦の問題、異文化圏に住む日本人夫婦の苦悩、その果てにたどりついた夫婦再生の過程を描く小説。

ギャラリー

『俺はその夜 多くのことを学んだ』
三谷幸喜／文 唐仁原教久／絵
(幻冬舎／本体1,500円)



入社式でひと目惚れした女性を、3年掛かりでデートに誘った。映画を観て食事をして……それだけで満足した俺は、家へ帰ってから、突然、彼女に電話したくなった。それが、思いもかけぬ事態に。俺の恋はいつだって空回りだ。人気脚本家が書いたコントに、人気イラストレーターが絵をつける。大人の男のための苦くもテンダーな絵本。



ゲルマニウムの夜
花村 萬月



偽善の背徳にいどむ凶暴な背徳

花村 萬月
『ゲルマニウムの夜』
(文藝春秋/本体1,238円)

第百十九回の芥川賞受賞の表題作から、後半部分の「王国の犬」を分離独立させ、新しく『文學界』(10月号)に発表した短篇「舞踏会の夜」を加えて三部構成の連作に仕立てているが、背徳を主題としてこれほど戦慄的な作品は稀だ。

舞台は東京都内の修道院兼看護院で、醜と呼ばれる主人公の僕は、中学を卒業するまでこの修道院で育てられた後、一たん社会へ出たが、男女二人を殺してこの施設に逃げ込んできて、修道院付属の農場で働いているという設定。院長のドン・セルベラは僕を匿う条件として、手淫の奉仕を要求、僕はそれを受

け入れて安全を保障してもらっている。そうした中で僕は、教子というアスピラント(修道女めざして修行中の女)をおかす。以来毎夜のように二人は、愛欲をむさぼる。この淫行はシスター・テレジアのかきつけるところとなるが、僕はこの三十年輩の童貞のシスターもおかす。

僕は凶暴だ。一年先輩の男の口笛を吹く習慣が気に入らないというだけの理由で、口に石をくわえさせ、ガムテープでふさいだ上で頬に蹴りを食らわせるが、相手は鼻も歯も折れただけでなく、頬に穴が開く重傷。中学時代、僕らの主食は米軍払い下げの澱粉の粉末(賞味期限がとうに過ぎた)を湯で溶いたもので、僕らはそれをゲロと言ったが、新入り少年でそれを咀嚼して食う奴がいて、ムカついた僕は青痰をそいつの皿に吐き出してやり、食わせる。それが先輩に知れて夜の屋上に呼び出

された僕は、相手の股間(股)のものを舐めると迫られ、ためらっていると猛烈な蹴りの連発を。終章の僕はジャンというわけありの混血少年と同性愛になっっているが、この少年もまた、院長に手淫の奉仕をすることで罪を許されている。というように、この聖域はまるでソドムとゴモラの菓窟だ。そしてその、偽善の背徳にいどむ凶暴な背徳が作品の主題だが、弁証法でいえばその先に真理が予感される。

評・藤田 昌司



KILLER ON THE ROAD
ジェイムズ・エルロイ
『キラ・オン・ザ・ロード』

映画『LAコンフィデンシャル』はヒット中だが、エルロイは決して人気作家ではない。作品歴では、初期の警察小説と出世作『ブラックダリア』からはじまるLA四部作との境界におかれている本作は、待望の翻訳といえるだろう。なぜ長く

避けられていた未訳本、待望の刊行

『キラ・オン・ザ・ロード』
ジェイムズ・エルロイ 小林宏明/訳
(扶桑社ミステリー文庫/本体686円)

敬遠されていたのか、理由は簡単。連続殺人鬼の一人称の告白の体裁をとった物語だからだ。逮捕された五十人殺しのシリアル・キラが自分に罪はないということを証明するために書いた手記の形で小説は進行する。狂犬エルロイの面目躍如たる作品であり、翻訳が二の足を踏んだのもうなずける。

エルロイは、むしろかれの小説世界の登場人物に似ているという印象を発信しつつ書いてきた書き手だ。だからこの小説でのモノローグはときに異様なリアリティをもって迫ってくる。ヘヴィ&タークで気味が悪い。とくに、少年時代の殺人者がまったく孤独で、閉じこもった己れの世界でコミックブックの悪役

を自分の空想上の守護神に仕立てあげていく過程の内的描写など、類をみない。大多数の正常な者が住む現実世界が、疎外された者によってどんなふうにも否認され、空白化されるかという具体性が恐ろしいほどの確に把握されている。全体としていうなら、入念に仕上げられた力作ではない。わりと短期間で書き走ったような粗さも目立つ。ただシリアル・キラ小説の流行に便乗しただけの作品には終わっていない。犯人の手記の形をとった数少ない異色作であり、ラフ&タフな

タッチから立ちのぼってくる痺気は場面によっては息をつまらせる。新聞記事や捜査官のメモなどを借りたドキュメンタルなモンターージュのスタイルは、LA四部作に引き継がれていく技法とも読めるだろう。今週の名セリフは239ページ。『賽がどこかで投げられたんだらう。理由なんか考えてもうんざりするだけだ。……六〇年代によく言われたように、自分の好きなことをやれ』ってことだ。

評・野崎 六助